

1. プレア・ヴィヒア寺院をめぐるタイ・カンボジア国境紛争の現状

カンボジア北部、タイとの国境となっているタンレック山脈上に、世界遺産に登録(2008年7月)されているヒンドゥー教のプレア・ヴィヒア寺院がある。タイ側では、カオプラヴィハーンの名で親しまれており、どちらも「神聖な寺院」という意味の言葉であるという。プレア・ヴィヒア寺院は、タンレック山脈の斜面を利用して、9世紀末、ヤショヴァルマン I 世の統治下で建造が始められ、12世紀初、スールヤヴァルマン II 世の時代に終わったと考えられている。ヤショヴァルマン I 世は、聡明かつ剛健な王で、在位中に北は中国の南方地域、東はベトナムのトンキン、南は海、西はミャンマーのサルウィン川に接する地域まで、その勢力下に収めた。このプレア・ヴィヒア寺院の位置は、眼下にカンボジア大平原が一望でき、同時にタイの平野も睥睨できるという点で、統治者にとって、まさにベスト・ポジションである。私は、このプレア・ヴィヒア寺院の頂上に立ち、すぐさま、濃尾平野を一望できる金華山頂の稲葉山城(岐阜城)を思い浮かべた。織田信長はそこで「天下布武」の気概を養ったのである。ヤショヴァルマン I 世も、ここで東南アジアの覇者としての気概を育んだに違いない。私もその場に立ち、カンボジア大平原を眼下に見渡したとき、まさに気宇壮大となり、「天下の覇者となる魔力の虜」となった。

2011年2月4日、このプレア・ヴィヒア寺院地域をめぐる、タイとカンボジア両軍が交戦状態となり、数千人の避難民が発生、双方に民間人を含め数十人の死傷者が出た。国際司法裁判所(ICJ)は、1962年にこの地域をカンボジア領に帰属するという裁定を下したが、タイは周辺の4.6平方キロメートルの土地について、タイ領だと主張し続けていた。同寺院が世界遺産に登録されたことが、タイ側の態度を硬化させたようであり、武力衝突に至った模様である。以降、同地域は紛争地域とされており、現在も日本の外務省は、「渡航の是非を検討するように」との注意喚起情報を出している。今回私は、旅行社に「すべては自己責任として処理します」との誓約書を差し出し、この地域に入った。

もともと麓の参道はタイ領となっており、現在、カンボジア側からの観光客はほとんど使用していないという。カンボジア側は断崖絶壁であり、山頂に行くには大きく迂回し、山の裏側から登るようになっていた。ところがこの道路は急坂続きで軍用ジープでなければ登坂ができず、途中のチェックポイントで乗り換えを命じられた。その売店で、ガイドがタバコを3カートンも買ったので、不思議に思って尋ねると、「見ていればわかる」という返事。たしかにジープが急坂を登り始めると、曲がり角ごとに兵士が立っていて、ガイドに何ごとか話しかけてくる。そのつどガイドは、先ほど買ったタバコのカートンを破り、中から1個ずつ取り出し手渡して行った。遠くから声をかけてくる兵士もいて、ガイドがタバコを兵士めがけて投げると、兵士は慣れた手つきで上手にキャッチした。私はとっさに、北海道の熊牧場で観光客がリンゴを投げると、熊が上手にキャッチする光景を思い出し、吹き出してしまった。同時にここが紛争地域であるということを、すっかり忘れてしまった。

山頂付近でジープを降り、頂上の寺院を目指して、参道や階段を登っていった。あちこちに兵士がたむろしていたが、そこには紛争中であるという緊張感はまるでなかった。この山全体が固い岩で形成されており、プレア・ヴィヒア寺院はその岩石を切り出して作り出されたという。参道も、その自然の岩山を上手に敷石に利用した設計になっており、一枚岩の上を滑らないように注意しながら、登っていった。崩れかけた山頂の寺院内では、仏教僧が仏像を安置し、読経を行っていた。この寺院には、すでにヒンドゥー教の影響はなく、今では仏教寺院となっているということだった。

壮大な寺院跡と絶景を心に残し、登ってきた道とは違う道を降りていくと、軍用監視所があり、そこで観光客が監視用の望遠鏡をのぞき込み、兵士たちと談笑していた。そこでもガイドが兵士にタバコを渡すと、私にも監視用望遠鏡を覗か



せてくれた。それは高性能のもので、タイ軍兵士の人数や行動まで、手に取るように分かった。観光客の中には、兵士の自動小銃を借りて、肩から掲げて記念写真を撮る者もいた。

なお国際司法裁判所は、今年10月にも、国境問題に判断を下すという。

2. 中国企業のコック湖開発、住民の反対運動で頓挫

2007年から、カンボジアの民間企業と中国企業が合弁で、プノンペン中心部から車で約10分の距離にあるコック湖周辺の不動産開発を進めてきた。カンボジア政府はコック湖開発計画を重視しており、合弁企業が住民を立ち退かせたり、コック湖を埋め立てたりすることを容認してきた。しかし数年前から住民の反対運動が激しくなり、今年に入って、90世帯以上の住民が政府や企業に代替地などの補償を求めて、抗議行動を強め、警察との衝突で40人が逮捕される事件も発生した。

住民の反対運動の強行の結果、現在、コック湖開発計画はいったん中断されているが、今度は別の問題が浮上してきているという。元来、コック湖はプノンペンの中心近くにあつて、遊水池の役割を果たしてきていた。それを、排水設備などを真剣に検討することなく埋め立ててしまったため、プノンペン中心部の雨水や汚水が流れ込む場所がなくなり、街中に溢れかえるようになったというのである。カンボジア政府は、先進各国から都市計画の知恵を借りて、早期に手を打つべきだろう。



《 政府庁舎前に広がる埋め立て地 》

3. イオンモール建設進行状況

イオンは現在、プノンペンの中心部のパサック川沿いの新興レジューエリアとして開発が進んでいるダイヤモンド・アイランドの近くに、延床面積約10万㎡の「イオンモールプノンペン」を建設中である。2014年春のオープン予定で、約150店舗の専門店を入居させるという。すでに、タイのシネマ・コンプレックス最大手のメジャー・シネプレックスが、映画館計7スクリーンと14レーンのボーリング場の開設を決定している。さらにタイのレストラン・チェーンを展開するS&P シンジケートも、カンボジアでの第1号店を同モール内に出店することを発表している。それでもまだテナントは、1/3ぐらいしか埋まっていないというウワサもあり、順風満帆というわけではないようだ。

イオンはこのモールの近くに、トップ・ヴァリュー製品の販売実験店を設けているが、客足は鈍く、テストケースとしての効果もあまり期待できないようである。店頭と並んでいる商品は、ほとんどが日本製で、プノンペン市内の他の店と比較して、若干、安めである。

《 トップ・ヴァリュー実験店 》 →



さらにイオンは、昨年10月にイオンクレジットサービスを立ち上げ、日系企業初となる割賦販売事業を展開し始めたが、まだ第1号店がオープンしたばかりで、軌道に乗っているとは言い難いようだ。店舗に入って、店員に割賦代金や方法などの具体的な話を聞いてみたが、要領を得た答えは返って来なかった。

← 《 イオン・クレジット第1号店 》



↑ 《 建設中のイオンモール 》

4. 和橋工業園の現状

3/05、日本のビジネスグループ和橋会は、カンボジア地元企業と協力して、プレイベン州に経済特区を開発する合意書を交わしたと発表。その予定地は、プノンペンからベトナムのホーチミンへ向かう国道1号線上にあるメコン川渡河のフェリーターミナルの付近であるという。現在、そこに日本の無償資金協力による「ネアックルン橋」が建設中である。2010年12月に着工され、竣工は2015年の予定。全長2215mの橋で、完成するとカンボジア最大の橋となるという。この橋が完成すればホーチミンへの



物流時間が短縮され、カンボジア経済をさらに大きく発展させることになるが、その反面、今までフェリーターミナル関連で職を得ていた地元民は、一気にそれを失うことになる。和僑会はそれの解決策として、ここに経済特区としての和僑工業園を建設し、地元民に職場を提供しようと考えたという。現在、ネアックルン橋の建設は着々と進行中であり、陸地にはすでに橋脚がしっかりと出来上がっている。

私はフェリーターミナル周辺で、和僑工業園予定地の看板を探し回ったが、それらしきものは見当たらなかった。近くの村の村長宅を訪ね、その場所を聞いてみたところ、「そんな話は聞いたことがないが、少し向こうの方に、政府から販売禁止を言い渡されている広い土地がある。そこではないだろうか」と話してくれた。そこですぐに、教えられた場所に行ってみたが、そこにも看板はなかった。ひょっとすると対岸のカンダール州なのかもしれないと考え、川を渡って、国道沿いをくまなく調べてみたが、結局、和僑工業園予定地を特定することはできなかった。

5. ポイペト経済特区(SEZ)調査報告

プノンペンから国道5号線を、西に向かって車で6時間ほどひたすら走ると、タイ国境の街として栄えるポイペト市に着く。国境周辺は、タイの商売人やタイへ出稼ぎに行くカンボジア人などの往来が多く、ごった返していた。ポイペトからバンコクまでは、車で3時間ほどの距離で、経済交流が活発だという話だったが、国境周辺ではコンテナ・トラックなどはほとんど見かけず、国境の税関のビルそのものも、活発な物流を捌ききれそうなものには見えなかった。ただしカジノを併設しているホテルが林立しており、夜になると、ポイペトは見違えるように賑やかとなる。私は、その中の1軒のホテルに泊まったが、ホテル代はパーツ支払いであり、リエルもドルも拒否された。ホテルの宿泊施設は、ベトナム国境沿いのカジノ兼用ホテルと同様に、四つ星というわりには良くなかった。朝食もまずかった。ただしカジノ施設だけは豪華華麗で、多くのタイ人が徹夜で賭け事を楽しんでいた。

翌日、ポイペト経済特区(SEZ)を訪ねてみた。ホテルのフロントでその場所を聞いたが、はっきりとした答えが返ってこなかった。SEZの事務所に電話をしたところ、SEZ管理者が途中まで出迎えに出るという。国道5号線を15分ほどプノンペン側に戻った場所に、彼は待っていた。そこから彼の車に誘導されて脇道に入った。その道は未舗装で、なおかつデコボコであり、とてもコンテナ・トラックが頻繁に通行できるような代物ではなかった。私はその悪路に揺られながら、「きっとこれは近道なのだろう」と思っていた。広大な野原を突ききって、悪路を15分ほど走った場所に忽然とSEZが出現した。そしてその正面で車を降りたとき、私はこのSEZは、この悪路がメイン道路であることを確認した。



《ポイペトSEZ正面にて》

事務所で管理者から、「このSEZは2005年のオープンで、現在入居し稼働している工場は2社である」という話を聞いて、私は思わず耳を疑ったが、すぐにこの工業団地が開店休業状態であるということを理解し、道路を舗装する資金さえも枯渇しているという悲惨な現状であることがわかった。その後、管理者は、「このSEZのオーナーはカンボジア華人であり、マカオに100以上のビルを所有している。このSEZはやがてバンコクとの高速道路で結ばれ、2014年には国境沿いに新税関も建設される予定であり、タイとの国境貿易で極めて有利な場所である。このSEZは広さが380ヘクタールであり、3期に分けて開発し、第1期は100社ほどの入居を予定しており、従業員総数で5~7万人を想定している」と、まくしたてた。それを聞いて私は、「この近辺の労働者はタイへ出稼ぎに行ってしまうていて、そんなにいないのではないかと、反射的に質問をした。すると彼は、「そうです。この地域周辺にはそんなに労働者はいません。したがって寮を作って地方から連れてきます」と、平然と語った。その後も彼は、立派なSEZ完成予想図の前で、このSEZのメリットをとうとうと延べたが、どうしても私には、このSEZが工場で満杯となり、オーナーの目論見通りのスケールになるとは思えなかった。私はポイペトSEZを見回りながら、「現在、このようなSEZがカンボジア全体に、20箇所近く存在している。しかもこれらのSEZは開発競争の様相を呈しており、共倒れの危険性がある」と思った。

このSEZの具体的な数字を以下に記しておく。

- 土地は70年のリース 35US \$ / 1m²
- レンタル工場はなし
- 電気代 0.15US \$ / KWH (タイ側から供給)
- 水代 0.35US \$ / 立方メートル (乾燥地帯のため、溜め池を作り浄化して水を供給)
- ワーカーの平均月給 100US \$ (実際にはタイへの出稼ぎ労働者の給与に影響され、2~3割増)
- ワーカーの募集費用 一人当たり20US \$
- 寮費 6~8人部屋 40US \$ / 月 一人当たり5US \$ 強

以上